資　料

# 文献から見た看護教育における ポートフォリオ評価活用の現状

小島　さやか
新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

# The Current Status of Practical Use of Portfolio Evaluation in the Nursing Education : A Literature Survey

Sayaka Kojima
NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSING

キーワード
ポートフォリオ、看護教育、文献研究

Key words
portfolio, nursing education, literature survey

## Ⅰ　はじめに

ポートフォリオ評価法は、2000年ごろから日本の看護界においても注目され、徐々に導入されている。2000年に我が国で導入された「総合的な学習」などを始め、自ら考え実践する教育の重要性、標準化されたテストのような定量的で数値的な評価ではなく、質的な評価をも求められている時代に即したものと言える。

ポートフォリオは、「自らの意思で、自らの成果や自ら手に入れた情報を一元化したもの[1)]」であり、「学習してきたことや学習経験に対する各人の意味づけを表現するため」のものである[2)]などと定義づけられている。ポートフォリオは本来、画家や建築家が自分の作品を売り込むために用いる「紙ばさみ」を意味していた。そのファイルを見れば、現在の作風や力量が一目瞭然であるだけでなく、自らがこれまでの作品を振り返ることで今後の自分の課題や目標も明確になってくる。このポートフォリオを評価に活用したのがポートフォリオ評価である。ポートフォリオは、ロンドン大学のＳ.クラーク教授らが考案し1980年代後半にイギリスやアメリカで取り入れられた後、1990年代後半に日本に入ってきたとされている。

我が国において看護分野で初めてポートフォリオについて述べられたのは、2000年に英国における卒業教育を紹介した特集だと言われている[3)]。英国の看護者は、看護の質の保持、就職してからの看護者自身の成長を促すこと、免許申請時の知識や技術を維持し、さらに高いものへと究めていくこと[4)]を目的に、専門職としての経験の再評価、現在の自己評価、目標設定と行動計画を立て、成長計画を実行に移す、という課程にポートフォリオを導入して取り組んでいる。この、英国での取り組みが紹介された後、日本の看護界でもポートフォリオ評価法が着目され、徐々に報

告が増えている現状である。

国内の看護文献におけるポートフォリオ活用の現状については2005年に加藤ら[3)]が文献検索による調査を行い、抽出された15件を評価したものがある。その後、日本の看護分野でもポートフォリオの導入が増え、実践報告が多くなされるようになったが、各々の報告を分類し、評価したものは2005年以降殆ど見られない。

そこで、日本の看護教育におけるポートフォリオ評価導入・実践の現状、またその効果や今後の課題を知ることで、より有効に効果的にポートフォリオを使う方法を見いだせると考えた。さらに看護界の変化に伴う新たなポートフォリオ活用の可能性についての示唆を得られると考え、本研究に取り組んだ。

## Ⅱ　目的

１．ポートフォリオ評価をテーマに発表された文献を検索し、看護教育におけるポートフォリオ評価の実践の対象者、実践内容を知る。

２．看護教育における今後のポートフォリオ評価活用の示唆を得る。

## Ⅲ　対象と方法

### １．調査期間と対象

1990年から2011年８月までの期間に報告された文献のうち、キーワード「ポートフォリオ」「看護」を検索語として医学中央雑誌webデータベースを用いて検索を行い、ヒットした119件のうち、タイトルおよび内容から、看護教育におけるポートフォリオについて述べられていると判断した116件から、ポートフォリオ評価導入の現状を調査した。

### ２．分析方法

上記１．によって得られた文献から収録年、論文の種類、研究対象者別に分類した。論文の種類は、医学中央雑誌の分類に基づき「原著」「総説」「会議録」「解説」「座談会」「一般」の６項目に分類した。研究対象者は、タイトルおよび内容から「学生」「新人看護師」「一般看護師（対象者として管理者・新人看護師と明記されているものを除いたもの）」「看護管理者」「認定看護師」「教員」「患者・家族」「その他」の８項目に分類した。

### ３．倫理的配慮

本研究を行うにあたり、日本看護協会「看護研究における倫理指針」（2004）に基づき配慮を行った。

## Ⅳ　結果

### １．文献の年次推移と動向

検索された文献116件のうち、記事区分別で見ると、解説62件、会議録32件、原著16件の順に多く収録されていた。（表１）

また、収録年別に見ると、2000年以前の文献は無かった。2000年に４件が収録されたのを最初に毎年数件の収録があり、2005年から文献収録件数が増加していた。2010年には、過去最多の31件が収録されていた。研究対象者を分類すると（表２）のようになった。対象者の内訳は、基礎教育（学生）が49件、卒後教育（看護師）が52件とほぼ同じ割合であり、患者・家族7件、教員3件の順に続いた。（表２）

### ２．看護基礎教育におけるポートフォリオの活用の実際

看護基礎教育（ここでは看護系大学・短大・専門学校等における保健師・助産師・看護師課程履修学生に対する教育を指す）に関連するポートフォリオ活用の文献は49件収録されていた。看護学生に対してどのような看

**表１　看護関連雑誌における文献の収録年、種類（2000年～2011.８月）**

| 年 | 原著 | 総説 | 会議録 | 解説 | 座談会 | 一般 | 件数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 3 |
| 2001 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 2002 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2003 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 2004 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 3 |
| 2005 | 1 | 0 | 1 | 19 | 0 | 0 | 21 |
| 2006 | 5 | 0 | 1 | 4 | 1 | 0 | 11 |
| 2007 | 3 | 0 | 2 | 7 | 0 | 0 | 12 |
| 2008 | 2 | 0 | 12 | 3 | 0 | 0 | 17 |
| 2009 | 1 | 0 | 9 | 2 | 0 | 0 | 12 |
| 2010 | 3 | 0 | 6 | 21 | 1 | 0 | 31 |
| 2011 | 1 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 4 |
| 合計(件) | 16 | 1 | 32 | 62 | 2 | 3 | 116 |

**表２　看護関連雑誌における研究の対象者（2000年～2011.８月）**

| 年 | 学生 | 新人看護師 | 一般看護師 | 認定看護師 | 看護管理者 | 教員 | 患者・家族 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2000 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 2001 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2002 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2003 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2004 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2005 | 4 | 1 | 9 | 0 | 5 | 1 | 1 | 0 |
| 2006 | 6 | 0 | 2 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 |
| 2007 | 6 | 1 | 3 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 |
| 2008 | 8 | 0 | 5 | 1 | 1 | 0 | 2 | 0 |
| 2009 | 6 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 2010 | 15 | 1 | 5 | 3 | 3 | 1 | 2 | 2 |
| 2011 | 2 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 合計(件) | 50 | 5 | 29 | 6 | 12 | 4 | 7 | 5 |

| 基礎教育 | 卒後教育 |
|---|---|
| 50 | 52 |

護学領域でポートフォリオ評価が用いられているかを調べたところ、基礎看護学、成人看護学、老年看護学、精神看護学、母性看護学、教養科目と、特定の領域に限定されることなく用いられていることが分かった。

１）実習における活用

ポートフォリオ評価は、実習の自己評価、自己教育力の育成、看護技術演習の習得等を目的として活用されている例が多く見られた。迫田ら[5]により、１年生から継続してポートフォリオ作成を行うことにより、講義から演習へ、そして実習につながるポートフォリオプロジェクトに取り組むことで学生が成長と課題を自ら実感し、学習方法として効果的であったことが報告されていた。

２）演習における活用

看護過程演習では、吉田ら[6]は看護過程演習の中にメタ認知を意識した「気づきと学び（記録による振り返り）」を加え、成果としての記録をポートフォリオとし俯瞰できることによる学習効果の示唆を得ていた。同じく看護過程演習に関して、佐藤ら[7]は看護過程演習終了後に提出した「成長報告書」の分析から、ポートフォリオ評価を通しての学びとして、「プロジェクト学習能力」「自己評価と課題発見力」「自己表現力」「自己肯定力」を挙げていた。

また、前田[8]らはグループワーク、研究レポート作成、学会形式の発表会を行う授業の中でポートフォリオを作成することは自己評価や研究の基礎となる資料整理や活用の方法など、研究のスキル形成につながることを明らかにした。

３）授業記録としての活用

渥美[9]は、精神障害当事者が参加する授業を行う中で、学生に「日々の授業記録」としてポートフォリオを書かせ、その学習効果を確認した。岩田[10]らも、ポートフォリオでプレゼンテーションから学習したことの内容を分析する中で、ポートフォリオシートがセルフラーニングの評価の補助をする可能性があること、ポートフォリオの評価機能である自己評価・再構築・活動への動機づけが分析から確認できたことを述べている。さらに、講義と演習・臨地実習が点と点ではなく、線としてつながり看護観の育成や援助技術の習得が行えるよう、講義から演習、実習へとつなぐ試み[4]も行われていた。

４）保健師学生、助産師学生への活用

保健師学生に対する基礎教育、助産師学生の分娩介助実習・新生児受け実習の振り返りにポートフォリオを活用している例も見られた。ポートフォリオの考え方での評価により、学生が自ら課題を発見し解決策を考え、自己の傾向を認識し成長につなげていくことが出来ていた[11]。

5）デジタルポートフォリオ

従来行われてきた紙媒体によるポートフォリオ作成だけでなく、施設内に設置した無線ＬＡＮでポートフォリオ評価を行う大学[12]の例が2009年以降から数件報告されていた。e-Portfolio（ポートフォリオをデジタル化したもの）は、時間や場所を選ばずにアクセスが可能で、授業毎の課題やレポート提出、評価、管理、研究論文の添削や公開を行ったり、クリニカルラダーを取り入れて、学生の就職活動にも活用されていた。

## ３．卒後教育におけるポートフォリオの活用の実際

1）新人看護師への活用

新人看護師に対しては、入職後の新人対象研修で説明を行い導入しているケースが多かった。山本[13]は、新人が作成したポートフォリオの構成要素として、業務のタイムスケジュールと学習メモ、他者からのフィードバックの３種類を挙げ、タイムスケジュールには業務の成功談・失敗談から自分なりに編み出した仕事上の工夫や患者・スタッフとの間のエピソードを記載し、学習メモの中で自らの知識の定着の度合いの確認や得た知識の関連付けをしていた。さらに他者からのフィードバックを得ることで、自分の成長を実感できたり、次の段階への動機付けが得られたと述べていた。

2）一般看護師への活用

一般の看護師に対しては、目標管理、キャリア支援、看護研究支援、接遇、医療安全推進担当者への教育評価などの目的で導入されている文献が見られた。吾郷ら[14]は、ポートフォリオを活用した臨床看護研究支援を試みた結果、看護研究にポートフォリオを活用した者は活用しなかった者に比べて有意に「自己の成長が図れた」「自己教育力が高まった」「看護研究は社会に貢献するという方向性にある行為である」と回答したことが分かった。

3）看護管理者への活用

目標管理にポートフォリオを導入した例[15]では、ポートフォリオ活用群と非活用群で目標管理の達成度を比較すると、活用群は「モチベーションを高める」「業務改善の取り組みができる」「目標管理を同僚と共有できる」の達成度が有意に高かったことが分かった。管理者として、スタッフが自信を持てるような自己評価、エビデンスの確かな師長評価ができたことが大きなメリットであった。その他、クリニカルラダーや看護研究支援にポートフォリオを活用している報告も見られた。

4）認定看護師への活用

認定看護師では、経験や基礎教育課程が様々である対象者に対して各自が主体的に自己の課題に向かって学びを深めることを目的としてポートフォリオを導入していた[16]。ポートフォリオの活用により、学習意欲の他、緩和ケア認定看護師の実践能力に不可欠な対人関係能力や対象者の心情に関わるケアに必要な能力の向上が期待できると考察されていた。

5）デジタルポートフォリオ

ｅポートフォリオを導入した病院[17]では、導入の目的として①データの可視化により計画的なキャリアアップが可能、②看護管理者が目標管理、教育計画、評価などに活用できる、③システム化することで紙運用の際の人的・時間的コストを削減出来る、との報告があった。機能としては、研修状況や自己研鑽、技術チェックリスト、面接記録、キャリアラダー評価等を持ち、看護師はメリットと

して自己の実践能力の可視化が可能になり、自己の課題が具体的にイメージしやすくなったという。また、管理者や教育担当者も情報が一元管理できることで管理・教育業務に活用しやすくなったと報告されていた。反面、デメリットとして従来の紙運用ではできた個別の状況（中途採用者への年度途中での導入など）への対応の難しさが挙げられていた。

### ４．患者・家族教育におけるポートフォリオの活用の実際

患者・家族教育に関連するポートフォリオ活用の文献は７件収録されていた。糖尿病や精神疾患などの慢性疾患を抱える患者の自己管理や保健指導などにポートフォリオが取り入れられていた。

家族への活用については灘ら[18]が患者自身や家族でテーマを決めて入院に至る経過や現在の心境、検査結果、医師の説明、病状や治療経過状況、薬の効能、自らの目標などを書くことは、闘病意欲の向上や医療者とのコミュニケーションの深まりに効果があり、医療事故防止にも有益に作用すると述べられていた。

### ５．教員の評価・教育におけるポートフォリオの活用の実際

教員に関連するポートフォリオ活用の文献は４件収録されていた。安川ら[19]の報告では、教員を対象とした調査の中で、ポートフォリオ評価に関心があり、意欲があっても、考え方や進め方が分からないために一歩を踏み出せないでいる看護教員の姿が示されていた。また、共同で教育活動を展開するためのネットワークづくりを行う必要性や、ポートフォリオを作ることそのものを目的化しないことが大切であることも述べられていた。

## Ⅴ　考察

### １．ポートフォリオ評価法活用の現状

2005年、加藤ら[3]が本研究と同様の検索を行っているが、抽出された文献はわずか15件であったのに対し、本研究では116件、およそ８倍の文献が掲載されていることを考えると、看護分野においては、この数年間でポートフォリオ評価法が注目され、活用の頻度も領域も広がっていると言える。また、ある特定の看護分野に限定されずに活用され、成果報告がされている現状からは、教育において幅広い領域に応用ができる、ポートフォリオの柔軟性を裏付けるとも言えよう。ポートフォリオは、いわば学習者参加型の学習評価システム[2]であり自分の学習上の課題を自ら発見し、課題の解決のための適切な学習方法を選択し、実行して、その結果を当初の課題に照らして評価し、問題点があれば修正していく能力の育成につながる。また、ポートフォリオを通して自己評価を行うことには「授業の内容に学習者の注意を向けさせ、学習成果や学習意欲を高める」ことを期待できる[2]。学習者の主体的な学習の取り組みを促すポートフォリオが看護においても効果的な教育及び評価の方法であると考える。石塚[20]は、ポートフォリオは従来の教師主導の一方的な評価から、コミュニケーションという相互作用を通しての共同評価となることから、学生の自尊感情や自信、学習意欲を育むこと、自己評価や他者評価という対話を通してメタ認知能力をつけるのに有効であると報告している。学習目標を明確化すること、ポートフォリオ評価の方法について、学習者と指導者各々が認識し、共通理解を図ることで教育効果が上がると考えられる。

ポートフォリオ評価の教育・実践・研究への活かし方として安川[21]は、「自分の実績や成果を他人に分かる形で蓄積したポートフォリオを持ち寄り、互いに開示すれば、その人の

能力や関心、魅力、良さが分かるだけでなく、チームを組んでの共同作業がしやすくなり、相互の経験の幅を広げることが出来る」と指摘している。また、看護実践に対しては、「スタッフの人材育成と目標管理」、研究に対しては「現時点での自分の到達点を確認」「長期的な展望に立った研究計画を立案するために活用できる」と述べている。2010年4月には「保健師助産師看護師法」「看護師等人材確保法」の改正により、新人看護職員の卒後臨床研修が努力義務化された。研修体制の充実は、新人看護職員の離職防止や、看護の質向上、医療安全の確保、指導を担う中堅看護職の負担軽減にも有効と言われていることから、よりよい研修体制の整備・研修内容の充実が必要だと考える。

さて、大関[22]は大学教員の立場から、学生のそれまで受けてきた教育（義務教育・高校教育、ひいては、日本全体の教育方針など）を視野に入れて、生涯学習者となるように教育するのが私たち看護大学教員の努めである、と訴えている。教員として、自らも研鑽していく姿は、言葉を数多く積み重ねるより、何倍も学生に訴えるものがあるに違いない。

文部科学省中央教育審議会の学士課程教育の在り方に関する小委員会（2007）では、教員がティーチング・ポートフォリオ（自分の授業や指導において投じた教育努力の少なくとも一部を，目に見える形で自分及び第三者に伝えるために効率的・効果的に記録に残そうとする教育業績ファイル）の導入により①将来の授業の向上と改善，②証拠の提示による教育活動の正当な評価，③優れた熱心な指導の共有などの効果が認められると言われている。ポートフォリオ評価法の広がりと共に、学習者を支援する教員自らが研鑽していくことの重要性は今後高まるであろう。

ポートフォリオ作成上の課題として、ポートフォリオは自己成長の記録であるがゆえに自己完結的な作業が多く、作成するためのモチベーションの維持が困難になる場合[13]があり、意欲を取り戻すのに他者からのフィードバックを得る機会や他者のポートフォリオを見る機会を持つことが有効だったことも分かった。また小澤ら[23]の調査では、病院で５年間ポートフォリオを活用してきた中での課題として、「資料がたまってもタイムリーに整理できない」「面接直前になりあわてて整理している」「凝縮ポートフォリオになかなか移行できず、ポートフォリオが何冊にもなっている」などのスタッフからの意見が聞かれていた。

目標達成に向けて効果的にポートフォリオを作成するには、①指導者と学習者が共に目的・効果を正しく理解し、目標達成のために自らのポートフォリオを作成したいという動機付けを持てること、②日々ポートフォリオと向き合い、知の蓄積がタイムリーに出来ること、③他者からのフィードバックを適切なタイミングで受けることが出来る環境を作り、目標達成に向けてのモチベーションが保てるような援助が得られること、が必要条件であると考えた。

## ２．今後の展望

### １）デジタル化

ｅポートフォリオとは、「学習者の学習経験およびその結果身に付けた能力などの証拠となる、学習者が作成した一連のデジタル形態の学習成果物[24]」を指す。ｅポートフォリオにより、教育現場において「学びの統合ができる」「成果の確認ができる」「今後の課題が見える」環境が整備された。インターネットを介して何時でも何処からでも活用できることで、学生－教員、教員－教員の情報共有が推進され、学生の支援と支援内容の管理が可能となった。ただ、学生に対するｅポートフォリオに関する文献は３件報告されてはいるが、いずれも同一著者によるものであり、また卒後教育（病院）における報告も１件の

みである。これより、デジタルポートフォリオはまだ国内に広く普及しているとは言えない現状が推測される。デジタルポートフォリオを導入するには、対象者全員がモバイル端末を持ち、操作ができることと、情報のやり取りがスムーズに行えるための環境づくり、設備投資も必要などの困難さがあるが、社会のデジタル化、情報化時代の現在に対応しており、普及することでメリットは大きいと思われる。また、若い時からデジタルメディアに慣れ親しみ、日常生活でもメディアに触れる時間を多く持つ若者世代と、ベテラン世代とではメディア習得にかかる労力も、使いこなす力も大きく異なるはずである。どの世代もポートフォリオを自分の分身のように活用できるためには、見やすさ、使いやすさの工夫も必要であろう。いずれにしても、デジタルポートフォリオ自体の導入件数が少ないことから、今後、導入数が増え、さらなる検討課題が明らかになることが望まれる。

２）専門看護師、認定看護師への活用

高度化・専門分化が進む医療現場における看護ケアの広がりと看護の質向上を目的に、1996年に専門看護師が、1997年に認定看護師が誕生している。2011年現在では、既に専門看護師は600人超、認定看護師は9000人超となっている。大関[25]は大学院レベルでの教育にも各自が自主的に課題を見つけ、目標設定・計画・実行・再評価というプロセスにreflective practiceを取り入れたポートフォリオが不可欠であると述べている。鈴木[1]も、専門領域を体系化するため、また自己肯定感や自尊感情を高めるためにもポートフォリオは有効であると述べている。今後、さらなる活用の可能性があると考えられる。

３）外国人看護師候補生への活用の可能性

日本での看護教育界の新たな変化として、ＦＴＡ（自由貿易協定）、ＥＰＡ（経済連携協定）をきっかけとして、日本において看護に関わる外国人就労者の受け入れが可能となり、2008年からインドネシア、フィリピンより、日本で看護師免許の取得を目指す看護師候補生が入国している。しかし2011年、第100回看護師国家試験においては、ＥＰＡに基づく出願者399名に対して合格者は16名（合格率4.0％）が現状である。受験者全体の合格率が91.8％だったことを考えると、日本語による試験の壁が厚かったことがうかがえる。学習支援の一つの形としてのポートフォリオの導入は、本調査では看護を学び続ける全ての看護者にポートフォリオ導入が可能であったことを考えると、今後の検討の余地が大いにあると思われる。日本語という言語ツールによるコミュニケーションが難しい外国人との協同関係において、ポートフォリオがそれを補完する機能を果たすのではないだろうか。

ただし、彼らの日本語能力がポートフォリオ作成の上での大きな壁になる可能性がある。小玉ら[2]は外国人日本語教師を教育するなかで「記述式は日本語能力の高いコースに適していると考えられるが、その中でも低い方に属する研修生には、記述が多少困難で、実際短い記述になりがちである」と問題点を挙げている。そして、日本と彼らの母国、どちらの言語でポートフォリオを作成するかは大きな問題となる。学習者の母国語で作成すれば指導者の理解を困難にし、指導者の母国語で作成するとなれば、学習者は、自らの思いや課題達成状況について的確に述べられるだろうか、という問題に直面するであろう。誰のためのポートフォリオか、を考えた時に、ＥＰＡ（経済連携協定）に基づく受け入れの上限年数が３年であることを考えると、おおよそ来日後１～３年未満と思われる、在日年数の短い外国人看護師候補生にどのようにポートフォリオを導入するかは、大きな課題となるだろう。指導者がポートフォリオの意義、目的を的確に伝えられること、学習者がそれを理解出来ること、学習者が、指導者に伝わる形でポートフォリオの作成が出来るこ

と、などの課題があるだろう。

今回の調査では、外国人看護師候補生を対象としたポートフォリオ評価に関する文献は見られなかった。外国人看護師候補者に対して、教育支援システムの一つとしてポートフォリオ評価の導入を試みることには、国際交流、地域貢献、国の経済政策への協力などの大きな価値があると考える。

## Ⅵ　結論

１．看護関連雑誌において、看護教育におけるポートフォリオ評価に関する報告は2000年ごろ始まり、現在では５年前のおよそ８倍の研究報告がなされていた。

２．看護教育におけるポートフォリオ評価の対象者は、基礎教育（学生）と卒後教育（看護職）がおよそ半分ずつを占め、この二つの対象者で全体の約９割を占めていた。

３．学習者の主体的な取り組みを促すポートフォリオは、看護においても効果的な教育及び評価の方法である。また、ポートフォリオは特定の領域に限定されることなく、看護学を構成するあらゆる科目の評価に用いることが出来る。

４．看護教育・看護実践におけるポートフォリオ評価の課題は、効果的なポートフォリオ作成を支援できる環境作りである。それには、目的・効果の理解や作成への動機づけ、タイムリーな情報整理、他者からの適切なフィードバックが必要である。

５．今後の看護学におけるポートフォリオの活用の可能性として、デジタル化、専門・認定看護師等への導入、外国人看護師候補者への導入等が挙げられる。

**【注・引用文献】**


１）鈴木敏恵．看護師の実践力と課題解決力を実現する！ポートフォリオとプロジェクト学習．14．東京：医学書院；2010.

２）小玉安恵，木山登茂子，有馬淳一．外国人日本語教師教育へのポートフォリオ評価導入の試み．国際交流基金日本語教育紀要．2007；3：95-111.

３）加藤真紀，吾郷ゆかり，吾郷美奈恵，他．看護教育におけるポートフォリオ活用の文献展望．島根県立看護短期大学紀要．2005；11：99-107.

４）大関信子．看護教育にポートフォリオの導入を．Quality Nursing．2000；6(3)：52-53.

５）迫田綾子，川西美佐，松原みゆき，他．看護の力を育むポートフォリオプロジェクト学習講義から演習、実習へつなぐ試み．日本看護科学学会学術集会講演集．2009；29：177.

６）吉田礼子．看護過程学習の授業評価―メタ認知を意識した教授方略と看護過程展開の理解度―東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集．2010；19：50-59.

７）佐藤光栄，平栗智美．「高齢者の看護過程」にポートフォリオ評価を導入しての学び―成長報告書の分析から―．湘南短期大学紀要．2010；21：89-93.

８）前田由紀子，増田安代．精神看護学におけるグループワークの学習効果に関する検討―研究的思考と研究のスキルの基礎的育成に向けての試み―．九州看護福祉大学紀要．2006；8(1)：113-124.

９）渥美一恵．看護基礎教育における精神障害当事者参加授業の教育効果―ポートフォリオ「日々の授業記録」による検討―．日本看護学会論文集．看護教育．2011；41：71-74.

10）岩田みどり．PBL・テュートリアル学習のポートフォリオシートからみた学習効果プレゼンテーションに関する考察．日本赤十字看護学会誌．2009；9(1)：35-41.

11）丸山和美，遠藤俊子，小林康江，他．助産学生の分娩解除実習後の到達度―平成16年度後の改善点から検討する―．山梨大学看護学会誌．

2007;5(2):31-38.
12）吾郷美奈恵，石橋照子，梶谷みゆき，他．看護学生の自己教育力育成とキャリア形成Vol.6―“だんだんｅポートフォリオ“の評価と今後の課題―．看護展望．2010;35(7):680-685.
13）金子八重子，石井敦子，松本千香江，他．スタッフが成長を実感できるポートフォリオの活用．看護展望．2011;20-27.
14）吾郷美奈恵，加藤真紀，山下一也，他．臨床看護研究の現状とポートフォリオを活用した臨床看護研究の支援．島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要．2008;2:107-115.
15）鈴木敏恵．クオリティ・オブ・キャリアを高めるポートフォリオ―スタッフと組織がいきいきする“新しい目標管理”を始めよう！―．看護管理．2010;20(5):394-398.
16）筑後幸恵，松村ちづか，星野純子．緩和ケア認定看護師教育におけるポートフォリオ導入の効果．埼玉県立大学紀要．2010;11:35-39.
17）松田美智代，毛利王海，清水多嘉子，他．東大病院におけるｅポートフォリオの導入．看護展望．2011;28-34.
18）灘久代．医療事故防止に役立つ患者・家族のテーマポートフォリオの提言．看護教育．2010;51(12):1089-1091.
19）安川仁子．看護教員のポートフォリオ評価の認識　教員養成課程修了者の調査から．看護教育．2010;51(2):102-105.
20）石塚淳子，佐藤道子．ラベルワークを用いたポートフォリオ評価法の試み．聖隷クリストファー大学看護学部紀要．2006;14:63-72.
21）安川仁子．新しい評価システムを創る－ポートフォリオ評価の教育・研究への活用－．北日本看護学会誌．2007;9(2):1-3.
22）安川仁子．看護理論のテーマポートフォリオでの学生の学びと成長―「自己の成長報告書」の分析をとおして―．日本看護科学学会学術集会講演集．2008;28:471.
23）小澤直子，畑中睦子．スタッフの強みを活かすポートフォリオの活用．看護展望．2011;13-19.
24）Current Awareness Portal．ｅポートフォリオの活用方法．http://current.ndl.go.jp:2011/09/09
25）大関信子．英国の卒後教育での実際．Quality Nursing．2000;6(3):60-68.